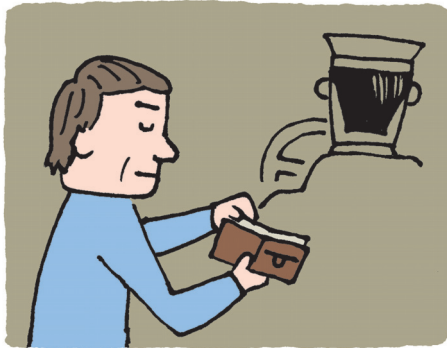


チップを渡すのは嫌いではない。

といってもふだんはあまりその機会がないが、たとえばタクシー料金を払うとき、四千五百円のところを五千円とってもらう。

道中、ひと言も口をきかず、不機嫌をわかりやすく表現していた運転手が、「どうも」と初めて声を出す。道順を伝えても無言無視で、おまけに急ブレーキ急発進だった凶暴な奴でも、「あ」とか「ん」とか声にする。依然その声はくぐもっている。それを背中で聞きながら、ま、ちよつとは気分が柔らくなかったか、と一瞬思い、急いで降りる。

四千五百円の場合は、五千円札があるとスムーズにいく。「(オツリは) いいです」スパッと一発で決め、すぐドア外に向かう。一万円札では「五千円とって」となって、そのあとのオツリを受けとるまでの間がもたない。少し機嫌の直った男が、それでもまだ面倒くさそうに、しわくちゃな千円札四枚プラス五百円玉プラス百円玉五つと、袋やポケットをごそごそ探っているのをじっと待たなければならぬ。運が悪いとそうなる。とりあえず外に出ようとドアノブに手をかけても、手動ではないから開かない。千円札五枚を揃えて出すのは、できれば避けたい。薄暗い車内で、指に唾をつけて札を数えたりしたくない。僕は元来ケチ



絵・江口修平

チップ

山崎 努

なたちなので、ペロペロとたつぷり指をなめ、しつかり枚数を確認することになるのだ。とにかくタイミングよく一挙動で済ませ、すばやく退散するのが僕のチップの渡し方。もたもたすると白けるから。

昔、若い頃は、沈黙のおかんむり君にちよつかいを出したりした。「聞こえないの？ 字書こうか」くらいは言った。今はもう穏やかなものだ。余分に払ったらこの男どんな風にほぐれるのかなあと考え、不機嫌にはつき合わない。

むろん感じのいい運転手さんも多い。僕の仕事を見てくれていて、ユニークな感想を述べて下さる人も稀まれにいる。そういう人にはうんと弾はじみたくなるが、それがかえってできない。失礼ではないかと躊躇ちゆうちゆうする。

チップを頂戴する側になった経験はない。一度だけ他人ひとからお金を恵んでいただいたことがある。食うや食わずの貧乏学生時代、同級の女子生徒がさり気なく手を握ってきた。ん!? となったら、掌の中に小さくたたまれた千円札があった。彼女は恥ずかしそうに笑っていた。お礼も言えないまま別れ別れになり、その人は先年亡くなってしまった。大切にしている生涯の思い出である。金銭にだって心が通うのだ。

やまざき・つとむ●俳優。1936年千葉県生まれ。舞台、映画、テレビなど出演作多数。日本アカデミー賞最優秀主演男優賞、助演男優賞、キネマ旬報賞主演男優賞等受賞多数。2000年春、紫綬褒章受章。著書に『俳優のノート—凄烈な役作りの記録』がある。

